



コレクション展2 歴史、再生、 そして未来

〈同時開催〉
栗津潔、マクリヒロゲル 2
グラフィックからヴィジュアルへ
栗津潔の視覚伝達論

2015年11月28日(土) →
2016年5月8日(日)

展覧会名	コレクション展2 歴史、再生、そして未来 〈同時開催〉 栗津潔、マクリヒロゲル 2 「グラフィックからヴィジュアルへ:栗津潔の視覚伝達論」
会期	2015年11月28日(土) → 2016年5月8日(日) 開場時間 / 10時~18時(金・土曜日は20時まで) 休場日 / 毎週月曜日(ただし1月11日、3月21日は開場)、1月12日、3月22日
会場	金沢21世紀美術館 展示室1-6
料金	一般 360円(280円) / 大学生 280円(220円) / 小中高生 無料 / 65歳以上の方 280円 ※()内は団体料金(20名以上)及び前売りチケット料金
出品作家	コレクション展2: 青野文昭、角永和夫、藤井一範、ミカ・ターニラ、三瀬夏之介、ヤノベケンジ 栗津潔、マクリヒロゲル 2: 栗津潔
出品数	コレクション展2: 6点 栗津潔、マクリヒロゲル 2: 85件
主催	金沢21世紀美術館 [公益財団法人金沢芸術創造財団]
お問合せ	金沢21世紀美術館 TEL076-220-2800

本資料に関するお問い合わせ

金沢21世紀美術館 広報担当: 落合
事業担当: 内呂(コレクション展2)、北出(栗津潔、マクリヒロゲル2)
〒920-8509 金沢市広坂1-2-1
TEL 076-220-2814 FAX 076-220-2802
<http://www.kanazawa21.jp> E-mail: press@kanazawa21.jp



コレクション展2 歴史、再生、そして未来

展覧会について

本年度のコレクション展1は、私たちにとっての「いま」を問いかける機会としました。それに続くコレクション展2は、近年新たに収集された作品の紹介とともに、既存のコレクションを再解釈することによって私たちの「未来」を考察する展覧会です。様々な国において、また国内の諸地域においても社会的な価値観が短期間で変化してゆく21世紀のなかで、現代美術はどのような可能性を持つのでしょうか。「歴史」や「再生」というテーマのもと、これからの私たちがたどる道程を皆さんと共に想像する機会となれば幸いです。また昨年に続き、「栗津潔、マクリヒロゲル2」も同時開催します。

出品作家・作品

画像1～5を広報用にご提供いたします。ご希望の方は下記をお読みの上、広報室へお申し込みください。
Email: press@kanazawa21.jp

＜使用条件＞

※広報用画像の掲載には各画像のキャプションとクレジットの明記が必要です。

※トリミングはご遠慮ください。作品が切れたりキャプション等の文字が画像にかぶったりしないよう、レイアウトにご配慮ください。

※情報確認のため、お手数ですが校正紙を広報室へお送り下さい。

※アーカイブの為、後日、掲載誌(紙)、URL、番組収録のDVD、CDなどをお送りください。

以上、ご理解・ご協力の程、何卒よろしくお願いいたします。

展示室2

藤井一範

FUJII Kazunori

《爆一転生》1999
金沢21世紀美術館蔵
© FUJII Kazunori
photo: SAIKI Taku



1

1969年富山県南砺市(旧・井口村)生まれ、同地在住。金沢美術工芸大在学中に同大教授であった久世建二の影響を受け、陶芸の素材である土の物質性に着目する制作態度を学び、独自の造形の在り方を模索する。在学中に自ら「爆陶(ばくとう)」と名付けた独自の表現方法を生み出し、以後、制作の中心となる。「爆陶」とは、成形した土に火薬を仕込み、それを爆発させたものを乾燥の後、焼成して作る造形である。爆発という自然の極地といえる現象と、火によって形を永久的に残す土という素材の両者に深く関わることで生まれる藤井の造形は、芸術行為の根本に立ち戻るものでもある。

展示室2

角永和夫

KADONAGA Kazuo

《Wood No.5 CJ》1984
金沢21世紀美術館蔵
© KADONAGA Kazuo
photo: SHOZU Kazuo



2

1946年石川県白山市(旧・鶴来町)生まれ、石川県金沢市在住。当初、画家を志していた角永は、コンセプチュアル・アートを学ぶ中で、木を素材とした作品を制作するようになる。皮を剥いた杉の丸太を横にスライスした作品や、同じく丸太を小さなブロックに切断した後、再び丸太の姿に構成するといった制作スタイルを1980年代に確立。ガラスや紙、竹など、他の素材を用いる場合も人為的な加工を極力排除し、素材がもともと持ち合わせている性質や作品の生成のプロセスを可視化するような制作態度を貫いている。

展示室3

青野文昭

AONO Fumiaki

《なおす・代用・合体・連置》
「震災後亘理町荒浜で収拾した部屋
一壁面の復元」2013
2013
金沢21世紀美術館蔵
© AONO Fumiaki
photo: SAIKI Taku



3

1968年宮城県仙台市生まれ、同地在住。1992年、宮城教育大学大学院美術教育科修了。在学中から「修復」という概念を作品に取り入れ、捨てられた物を収拾して、その欠損部分を修復することで彫刻作品を制作してきた。全体がどのような形であったのかを推測しながら、完全に元に戻すというわけではなく、欠けている部分に新たに別の物を充て、補い、なおすという作品である。融合や浸食によって異形を生み出す行為は、街中の既存の壁や路上にも及び、「美術の作品とは一体何か」についての疑義と批評も含んでいる。

展示室4

ミカ・ターニラ
Mika TAANILA

《フィンランドで最も電化した町》2004-2012
金沢21世紀美術館蔵
Mika Taanila 2012 © Kinotar/Elotar
photo: Anders Sune Berg
courtesy of Kinotar Oy and Mika Taanila
The photo is taken
at dOCUMENTA (13) in June 2012.



4

1965年ヘルシンキ(フィンランド)生まれ、同地在住。ヘルシンキ大学で文化人類学を修めた後、事実とファンタジーの境界を往来しながら「テクノ・ユートピア」とも呼ぶべき未来の光景を独自の短編フィルム、ビデオ、写真の作品として発表してきた。テクノロジーが現代社会において震央になるかについては、近代化の中で芸術の主要なテーマのひとつになったが、厳密なストーリーを持たない、事実を混ぜ合わせたようなターニラの作品は、実験的である以上に、創造的なドキュメンテーションといえる。

展示室5

ヤノベケンジ
YANOBE Kenji

《ビバ・リバ・プロジェクト・スタンダー》
2001
© YANOBE Kenji
金沢21世紀美術館蔵
photo: KIOKU Keizo



5

1965年大阪府茨木市生まれ、大阪府高槻市在住。鉄など様々な素材を使って立体作品を制作するアーティスト。原体験として日本万国博覧会(1970年)を持つ。それは、心躍らされる「未来」であったが、会期終了後はその未来の「廃墟」となった。人が抱く「夢」と、その「実現」との間にある断絶。両者の間で葛藤しながらいかにサバイバルするかということを制作のテーマとしている。2001年頃よりリバイバルをテーマに掲げ、「廃墟」からの再生を追求する。

展示室6

三瀬夏之介
MISE Natsunosuke

1973年奈良市生まれ、山形市在住。はじめ京都・奈良を拠点に制作活動を行っていた三瀬は、山形の大学で教鞭をとるようになった2009年頃から、東北の風土・風俗に対する民俗学的なアプローチを試み、それによって現代美術の可能性を追求するようになる。画家は、墨のたらし込みやデカルコマニーによる偶発的なイメージ、細筆を用いて墨で繊細に描き出されたモチーフなどを組み合わせ、和紙の断片を一つ一つ継ぎ接ぎしながら画面を構成・拡張させていく。そこには特定の地域に固有の様相ばかりではなく、実際に目にする事の出来ない宇宙の成り立ちや広がりまでも表現しようとする画家の高い意識が投影されている。

〈同時開催〉

栗津潔、マクリヒロゲル 2

グラフィックからヴィジュアルへ 栗津潔の視覚伝達論

展覧会について

2014年からスタートした「栗津潔、マクリヒロゲル」展は、2006年から2007年度に栗津デザイン室から受贈した約4000件の作品・資料の継続的な調査から、毎年、多角的な切り口で栗津潔の世界を紹介するシリーズです。2回目となる今年度の展覧会タイトルは、「グラフィックからヴィジュアルへ：栗津潔の視覚伝達論」です。

1960年代は、1960年世界デザイン会議の日本開催に始まり、1964年東京オリンピック、1970年日本万国博覧会への動向、1965年のグラフィック・デザイン展「ペルソナ」、1970年日本宣伝美術協会解散など、デザイン界において、劇的な発展と変化の時代でした。

当館所蔵の《視点の移動》は、栗津潔が1963年に手がけたポスター・サイズのレリーフ作品です。本作品は第13回日本宣伝美術協会（日宣美）展に出品されたものであることが今年の調査で判明しました。日宣美は、1951年に第1回展、1969年の第19回目を最後とし、翌1970年に解散しました。栗津潔は、1955年の第5回展にて《海を返せ》で日宣美賞を受賞以降、1965年（第15回）を除き、1962年（第12回）から1968年（第18回）まで審査員を務めるなど、本協会において主要な役割を担う存在でした。

本展覧会では、《視点の移動》に見受けられる波、指紋、「視点の移動」という文字といった特徴に焦点をおきながら、1960年代の栗津潔の活動、特に、デザイン会議の関連展覧会、日宣美展、「ペルソナ」展に出品された作品や関連作品・資料を展覧します。さらに、1968年に複数台のスライド・プロジェクションを用いた空間表現「エンバイラメント」への展開を紹介します。1960年代に栗津が志向したグラフィック・デザインは、グラフィックからヴィジュアルへ、すなわち、視覚伝達という考え方を発展させ、「視覚伝達論」*1に結実します。こうして、1960年代に確立していった栗津潔のグラフィズムを考察します。

*1『デザインの領域4（現代デザイン講座）』（風土社、1969年）pp.91-152に収録

展示構成

1. グラフィックからヴィジュアルへ

1955年日宣美術賞受賞から1960年代前半までの栗津潔作品と1960年世界デザイン会議の関連展出品作品など。

2. グラフィック・デザイン展「ペルソナ」(1965年)

館蔵品にある栗津潔出品作品と関連資料(草稿など)。

3. 1960年後半の日宣美出品作品、栗津のグラフィックの空間への展開

作家プロフィール

栗津潔(あわづ・きよし)

1929年東京都生まれ、2009年神奈川県川崎市にて逝去。

独学で絵・デザインを学ぶ。1955年、ポスター作品《海を返せ》で日本宣伝美術会賞受賞。戦後日本のグラフィック・デザインを牽引し、さらに、デザイン、印刷技術によるイメージの複製と量産自体を表現として拡張していった。1960年、建築家らとのグループ「メタポリズム」に参加、1977年、サンパウロ・ピエンナーレに《グラフィズム三部作》を出品。1980年代以降は、象形文字やアメリカ先住民の文字調査を実施。イメージ、伝えること、ひいては、生きとし生けるものの総体のなかで人間の存在を問い続けた。その表現活動の先見性とトータリティは、現在も大きな影響を与えている。



出品作家・作品

画像1~9を広報用にご提供いたします。ご希望の方は下記をお読みの上、広報室へお申し込みください。
Email: press@kanazawa21.jp

＜使用条件＞

※広報用画像の掲載には各画像のキャプションとクレジットの明記が必要です。

※トリミングはご遠慮ください。作品が切れたりキャプション等の文字が画像にかぶったりしないよう、レイアウトにご配慮ください。

※情報確認のため、お手数ですが校正紙を広報室へお送り下さい。

※アーカイブの為、後日、掲載誌(紙)、URL、番組収録のDVD、CDなどをお送りください。

以上、ご理解・ご協力の程、何卒よろしく願いたします。



2. 粟津潔《日宣美展 1950+10\1960／日本橋高島屋／日本宣伝美術会》1960 ポスター、オフセット B2
3. 粟津潔、杉浦康平《hiroshima-nagasaki document 1961》1961 書籍、The Japan Council against Atomic and Hydrogen Bombs
レイアウトとデザイン 30.4×29.4×4.2 cm 撮影:末正真礼生
4. 粟津潔《視点の移動》1963 石膏、印刷用紙、パステル、塗料／板 102.8×72.6×3.7cm 撮影:末正真礼生
5. 粟津潔《グラフィック・デザイン展「ベルソナ」草稿》1965年頃 原稿用紙29枚、A3用紙6束(77枚)
各25.3×17.5(原稿)cm、各29.8×41.8(A3用紙)cm
6. 粟津潔《塔(「ベルソナ」より)》1965 シルクスクリーン 24.7×26.5 cm
7. 粟津潔《ベルグソン(「ベルソナ」より)》1965 シルクスクリーン 24.5×26.3 cm
8. 粟津潔《変身あるいは 現代芸術の華麗な冒険／*ex·pose '68／草月会館ホール／草月アートセンター》1968
ポスター、シルクスクリーン 73.2×52.0 cm
9. 粟津潔《ホリデイ・オン・プリント(8つのプロジェクト・デザイン)》1968 写真(2015年リプリント) 14.4×25.4 cm
シンポジウム「変身あるいは 現代芸術の華麗なる冒険」(1968年7月17、18、19日／草月アートセンター) 資料提供:一般財団法人草月会

9以外: 所蔵 金沢21世紀美術館／上記全て: ©AWAZU Yaeko